

○三木幹子* 綾田雅子* 丹羽雅子**

(*共立女子短大, **奈良女大)

<目的> 力学特性の異なる15種の布で製作した同一面積のカウルネックの静的および動的なドレープの美しさに関する官能検査を行った結果、静的よりも動的評価の方が、高精度に“ドレープの美しさ”の官能評価値を予測できることをすでに明らかにした。本報ではカウルネックの面積が視覚評価に及ぼす影響を明確にするため、サイズの異なるカウルネックサンプルを製作し、動的官能検査により比較し、素材の力学特性との関係についても検討した。

<方法> 前回の実験において、動的視覚評価が良い、悪い、中間の試料布数種に、新たにシルクを加えた計8種類の布について、4段階にサイズを変えたカウルネックサンプルを製作した。これらのサンプルを、9号サイズの人が着装し、一定距離を歩行したときの動的ドレープの美しさについて視覚評価を行った。評価にはSD法を用い、6組の形容語対について5段階で評価した。被験者は20歳代の女性41名である。

<結果> 視覚官能検査によって得られた、各サンプルの最も高い評価値を持つサイズを総重量に置き換え W_0 とした。 W_0 と基本力学特性およびこれらを組み合わせた力学量パラメータとを関連づけた結果、布の曲げ弾性ポテンシャルと布の総重量に正の関係が認められた。すなわち、曲げ柔らかく弾性に欠ける試料の場合、面積が大きいとドレープ形状が安定しないが、面積が小さくなると、溝が明確になり、ひだを形成するため、評価値が高くなるなどの結果が得られた。以上、布の単位面積当たりの重さ、カウルネックの総面積、および布の力学特性との関係から、最も美しいカウルネックを設計する指針が得られた。